

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：32658

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20780027

研究課題名（和文） 近代日本における洋風庭園の様式形成過程と空間デザインに関する研究

研究課題名（英文） Study on style formation of western-style garden and its space design in modern Japan

研究代表者

粟野 隆（AWANO Takashi）

東京農業大学・地域環境科学部・助教

研究者番号：20393374

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治・大正・昭和戦前期に築造された近代の洋風庭園を研究対象とし、明治維新後における西洋庭園のわが国への導入から、洋風庭園として様式を確立するに至るまでの経緯と過程、および洋風庭園の構成・意匠の時代的変遷に着目した空間デザインの特徴を明らかにした。特に明治前期における擬洋風庭園、明治中期に形成された和洋折衷式庭園（芝庭）、明治後期に形成された和洋併置式庭園、大正～昭和初期に形成された実用主義庭園の特色を整理することができた。

研究成果の概要（英文）：The Purpose of this study is to examine the style formation of Japanese western-style garden and its space design in modern era(1868-1945). As the results of documents analysis and field survey, this study led the feature about pseudo-western-style garden in the early Meiji era, semi-western garden (lawn garden) in Mid-Meiji era and pragmatic style garden in and around Taisho era to the early Showa era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：農学

科研費の分科・細目：農学・園芸学・造園学

キーワード：近代庭園、洋風庭園、近代造園

1. 研究開始当初の背景

これまで、近代庭園の主たる対象として調査研究がなされてきたのは、京都を拠点に活躍した近代の庭園作家・7代目小川治兵衛（屋号：植治）の庭園作品である。特に京都造形芸術大学教授・尼崎博正氏を中心とした研究グループは植治研究を精力的に推進し、近代庭園史研究の本格的なスタートを切られた。それらの成果は、『植治の庭-小川治兵衛の世界』（1990、淡交社）、『石と水の

意匠-植治の造園技法』（1992、淡交社）といった専門書に取りまとめられ、無隣庵庭園や清風荘庭園など、植治の作庭した歴史的庭園の保護管理、修復等に大きく貢献している。このような先行研究により、近代庭園の歴史的・造園史の重要性がようやく認知されてきたといってもよい状況にある。

ただし、これまでおこなわれてきた植治研究などの先行研究は、和風庭園を対象としたものであり、洋風庭園については体系的な調

査研究がなされておらず、未解明の部分が多量にも多い点が、研究開始当初の背景であった。

2. 研究の目的

以上の研究の背景をふまえ、本研究では、次の4点の目的を掲げた。

(1) 洋風庭園の黎明に関する検討

明治維新後に導入された西洋庭園がいかなる空間解釈のもとに「洋風庭園」として様式化されたのか、また明治初期における洋風庭園の黎明を鮮明にする。具体的には、海外渡航者の西洋庭園観、外国人居留地に造営された住宅やホテルの庭園姿景を明らかにし、日本に導入された西洋庭園と、導入後に模索され始めた黎明期の洋風庭園との空間的特徴を整理する。

(2) 洋風庭園と近代東京に関する検討

すでに東京における和洋折衷式の洋風庭園(芝庭)については、その空間デザインと様式形成の时期的動向に関する知見、一定程度は得ているので、特に、明治後期から大正期に整形式として登場した洋風庭園の事例収集と空間デザインの整理をおこなう。

(3) 洋風庭園と近代別荘地に関する検討

明治中後期以降、居留外国人が保養のために各地に別荘を営んだことを契機に、東京を中心に洋風庭園を築造した近代の特権集団も、箱根、熱海、日光などの近代別荘地に別荘を多数造営している。そこで東京を中心に様式化された洋風庭園が、地方に波及した際にどのように変容したのかという観点で、近代別荘地の洋風庭園の事例収集、空間デザインの特徴整理をおこなう。

(4) 洋風庭園と郊外住宅地

明治末期以降、多数の郊外住宅地開発がおこなわれ中流階級の住宅庭園の登場をみた。ここではそのような庭園の計画設計のコンセプトとして提起された郊外住宅地における「実用主義」の庭園や「小庭園」にスポットライトをあて、芝生、テラス、花壇などで構成された小規模洋風庭園の実像を把握してゆく。

3. 研究の方法

本研究は文献調査を基本とした。収集する文献としては、近代に出版された住宅、造園、園芸に関連する雑誌、図書、図面、古写真、絵葉書、パンフレット等である。

また、現存する洋風庭園のうち、特に傑出したものについては、現地調査と写真撮影をおこなうこととした。

4. 研究成果

(1) 庭園洋風化への胎動

わが国では、既に17世紀中期に西洋の庭園様式が伝来していた。長崎出島オランダ商

館庭園である。本庭園は当初、四角形・円形・星形を図案化した園地として成立後、18世紀中期に方池と直線園路による左右均整の構成に、パーゴラや日時計などの装飾的施設を配した整形式庭園に改造された。また、19世紀中期には曲線園路を巡らした自然風景式庭園に姿を変えていった。

そして幕末から明治初頭の開化期には、外国人居留地を中心に洋風庭園が登場した。これらの庭園には、開放的な芝生を配し、直線園路の中軸線上にガゼボ(洋式四阿)を設置した横浜の山手公園(1871年完成)や、実現はしなかったが、洋行帰りの博物学者・田中芳男の立案による円形の泉と同心円状の花壇を配した大阪の舎密局園圃構想(幕末期)、環状に園路が巡った芝生を基調とする東京湯島の田中不二磨邸庭園(1876年頃完成)のように、純洋風たるものも存在する。しかしその多くは西洋を意識しつつも、旧来の日本庭園臭さを随所に残した「擬洋風」とでもいうべきものであった。

当時造られた擬洋風庭園のタイプは、大きくふたつに分けられる。ひとつは、日本庭園の構成を基本としながらも局部を洋風化したものである。その典型は築地ホテル館庭園(1868年完成)であろう。外国人には「エド・ホテル」と親しまれ、清水喜助による擬洋風建築の傑作としても知られるこのホテルは、一曜斎国輝筆「東都築地保留館海岸前庭之図」に庭園が描かれている。その構成は築山林泉を基調とするが、要所に鉢物を装飾的に置き、入口には蔓植物を絡ませたアーチ門を採用するなど、点景物に多分に洋風を加味したものであった。このタイプの特徴を具備したものには、他に横浜のイギリス公使館庭園(1871年完成)、長崎のグラバー邸庭園(1863年完成)などが挙げられる。

もうひとつは、前述のタイプとは反対に、整形的な洋風地割を採用するが、日本庭園の要素を局部的に取り入れたものである。その最たる事例は明治7年(1874)に住民参加型の整備によって誕生した函館公園の円形庭園である。「函館公園全図」では、芝生広場を扇形に四分割し、真ん中に円形の小園地を配した求心的な庭園地割を持っていたことが分かる。しかし中央の小園地には、雪見灯籠・手水鉢・仕立物の松がセットで配され、和と洋が異様な形で同居した独特な様相を呈していたのである。また、時期はやや下るが、楕円形の池を中心に左右対称の地割を持ちながら、春日灯籠や松を随所に用いた東京の鹿鳴館庭園(1883年完成)も、このタイプに含まれる。

(2) 和洋折衷式としての「芝庭」の流行

皇室・皇族・華族などの特権階級や政府高官・実業家らは、洋食・洋服など衣食住に関わる西欧的な生活様式を導入し、そのステイ

タス・シンボルとして洋館を構え、接客空間の充実を進めた。しかし日常生活は依然として和館で営まれ、和館と洋館が同一の敷地に位置した「和洋館並列型住宅」が、明治中期以降の特徴的な建物配置形式として形成された。和洋館並列型住宅は、和館と洋館が隣接したことから、全く性格の異なる建物が並んで見える点に外観上の違和感もあった。そのため庭園には、和洋の建物が併存する景観を調和させるため、広々とした芝生に緩やかに蛇行する園路を設け、芝生の処々に丸型の刈込や捨石（捨てたように無造作に配した伏石）をあしらった、和洋折衷式とでもいべき「芝庭」が現れた。芝庭は近代社交の一形態として定着しつつあった園遊会の場としても歓迎され、上流階級の住宅を中心に、大いに流行したのである。

特に東京では、芝庭の先駆といえる麹町雉子橋の大隈邸庭園（1878年完成）をはじめ、明治神宮旧御苑（1884年完成）、霞ヶ関の有栖川宮邸庭園（1884年完成）、永田町の鍋島邸庭園（1892年完成）、下谷茅町の岩崎邸庭園（1896年頃完成）など、芝庭を持つ庭園は枚挙にいとまがない。とりわけ、芝庭の典型とされる目白の細川邸庭園（1893年完成）については、華道家・近藤正一の著書『名園五十種』（1910）に、「芝生の間を円く繞る小径、松や躑躅の姿が半円形をなせるなど、所謂曲線の調和が巧く出来て居る為眼の運動が滑かに為り従て美観も現れ、精神にも愉快を感じる（中略）斯る意匠の庭園は和風の座敷にも悪はないが、洋館には一層その調和が可いやうに思ふ」と記され、園路や植栽による「曲線の調和」こそが、芝庭の空間デザイン上の本領であったことが分かる。

芝庭という様式は、とりわけ皇室と関係が深い。というのも、明治天皇と宮内省内匠寮技師・小平義近が様式の形成に寄与した人物と目されているからである。例えば、明治神宮旧御苑築造の際には、「こゝへ斯う道をつけねばいけぬ。一本路では散策にならぬ故、うねうねと曲折を多くするのがよい」と、天皇自らが小平の作成した設計図上に曲線園路を示したというエピソードが残る（中島卯三郎、「明治神宮の旧御苑」、庭園と風景13巻3号、1931年）。また、明治29年（1896）に旧来の庭園を芝庭に改造した元離宮二條城本丸庭園も、改造の指示は明治天皇が出し、実際の築造に小平が関与したと考えられている。さらに、各地に造営された天皇の御用邸で庭園を小平が手掛けたものには、田母澤御用邸（1899年完成）、静岡御用邸（1900年完成）があるが、庭園は悉く芝庭が採用されているのである。

（3）純洋風庭園の勃興

明治末期から大正期に至り、幾何学的・図

案的な構成を主軸とする本格的な純洋風庭園が現れた。それらは、皇室庭園、富豪層の住宅庭園、大学キャンパスの庭園などにみられる。

皇室庭園の主たる例は明治39年（1906）に洋風に改造された新宿御苑である。本庭園はフランス人造園家、アンリ・マルチネが原設計を手掛け、宮内省内匠寮の福羽逸人が適宜計画を修正、同技師・市川之雄の施工監理によって完成した。庭園は、蔬菜園、果樹園、フランス式庭園、毛氈花壇、動物園、日本庭園など、さまざまな構成が混在するものであったが、敷地全体は広々とした芝生と曲線園路を主としたイギリス風景式庭園によってまとめられ、明治における洋風庭園の到達点を示す事例として評価される。内匠寮は、同時期に東京の東宮御所庭園（1910年完成）、伊勢の神宮徴古館庭園（1910年頃完成）など、完成度の高い純洋風庭園を手掛けた組織としても知られる。

住宅庭園の純洋風化に重要な役割を担ったのは近代建築の父、ジョサイア・コンドルであろう。コンドルは近代東京を中心に、明治末期から大正期にかけて高輪の岩崎邸（現・三菱開東閣）、綱町の三井邸（現・三井倶楽部）、西ヶ原の古河邸（現・旧古河庭園）などで、洋館とともに洋風庭園の監修や計画に関与した。東京の近代住宅は台地端部に立地するものが多く、コンドルの関与した洋風庭園も洋館とセットで台地上部に配置され、時に斜面を階段状に造成し、テラス式庭園として意匠化を図った。なお、崖線下の低地部は、湿潤地であることを利用して和風の池庭とされた。したがって台地上に洋風庭園、低地部に日本庭園を具備した「和洋併置式」といわれる様式が形成されていったのである。

近代の関西でも、椎原兵市や橋本八重三といった近代造園家が富豪層の住宅に純洋風庭園を試み始めたが、とりわけ阪神間に数多く造られた。特に意匠的に傑出したものは六甲山中腹に大谷光瑞が造営した二楽荘庭園（1908年頃完成）である（大正5年以降、久原房之助が所有した）。本館の外観はインドのアクバル皇帝時代の建物やタージマハルを模し、庭園は本館の前後に配置されていた。玄関側の前庭は自然石を荒々しく配し、処々に草木を植栽したロックガーデン、反対側の主庭は中央に噴水を設け、全体を直線園路で区画して多様な草花による文様を巧みに作りだした毛氈花壇や境栽花壇を配したものであったことが古写真から判明する。しかし残念ながら本庭園は昭和7年（1932）に本館が出火して炎上し、灰燼に帰した。現在は跡形もなく、まさに幻の洋風庭園と呼ぶに相応しい。

なお、新宿御苑や二楽荘庭園で採用された

毛氈花壇は、東京市区改正計画で設置された日比谷公園（1903年完成）第五回内国勸業博覧会会場となった後公園化された天王寺公園（1909年完成）など、近代の公園にも洋風化の象徴として採用された構成要素と指摘できる。

ところで、明治38年（1905）文部省は学校園設置奨励の訓令を発し、各地の教育部局、教育学者、造園学者らは欧米各国の学校園の研究調査に着手した。そして学校校庭には運動場、遊園、菜園など、教育上必要な造園空間とあわせて、整然と並ぶ校舎間の空閑地に欧米各国のキャンパスにみられた整形形式庭園を積極的に採用し始めたのである。その現存事例は数少ないが、新宿御苑の改造にも関与した林修巳の手掛けた千葉高等園芸学校（現・千葉大学園芸学部）の沈床庭園（1909年完成）、宇都宮農林学校（現・宇都宮大学農学部）の放射状にツツジの刈込を配したフランス式庭園（1926年完成）、東京女子大学本館（旧図書館）前のタギョウショウをリズムカルに配植した芝生の整形形式庭園（1930年頃完成）、ミッション建築家・ヴォーリスが手掛けた神戸女学院西宮岡田山キャンパスの芝生中央に泉を配した楕円形園地（1933年頃完成）などが当時の姿をとどめている。キャンパス庭園は洋風庭園の様式形成においてもひとつの流れを築いたといえよう。

（4）実用主義庭園の登場

明治末期から大正期にかけては、煤煙や水質汚濁などの公害問題が顕在化し、コレラなど伝染病の流行とともに都市域では深刻な世相を呈していった。これに対し内務省は住宅地の郊外化を啓蒙する『田園都市』（1907）を刊行、大手私鉄会社の鉄道網の拡大とともに、沿線が郊外住宅地として開発されていった。これ以降、家庭博覧会（1915）、生活改善博覧会（1918）など、中流階級の生活改善の啓蒙を意図したイベントの開催、住宅改良会による「住宅」（1916）や生活改善同盟会による「生活」（1920）の雑誌創刊など、大正期を中心に住宅改良運動が巻き起こった。具体的には、台所や居間などに欧米様式を導入し、住まいの洋風化が進展してくるのだが、そのなかで新たな庭園像の模索が始まったのである。

東京帝国大学で教鞭を執っていた造園学者・田村剛は、建築家や教育家らとともに生活改善同盟会の調査会一員として『住宅改善の方針』（1920）の創案に参画、田村は庭園改善の検討において、戸外室、運動場、バックヤード、菜園などを重視した「実用主義の庭園」を掲げた。それは庭園を実用住宅の一部分と位置づけ、戸外の居室として経済的に利用し、生垣を推奨して街路の装飾にも役立てようとするものであった。意匠的には、

「果樹や蔬菜や花卉や緑陰樹或は芝生等を用い（中略）花壇や道路や植栽や区画等の線を、悉く直線として行く」（『実用主義の庭園』、1919）もので、中流階級の住宅庭園にも「洋風」の概念が取り込まれる画期となったのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

粟野隆、近代の大阪および阪神間を中心とした擬木・擬石・擬岩の導入と展開、ランドスケープ研究、74巻5号、査読あり、2011年、pp. 359-364

正田実知彦・鈴木誠・服部勉・粟野隆、曖依村荘庭園の構成と意匠に関する復元的考察、ランドスケープ研究74巻5号、査読あり、2011年、pp.379-382

粟野隆・丸山宏、近代日本の擬石擬木製作法、造園技術報告集6号、査読あり、2011年、pp.140-143

粟野隆、近代の庭園632号、歴史と地理、査読無し、2010年、巻頭図版およびpp.18-27

粟野隆、古河家の邸宅と旧西ヶ原本邸の庭園、日本庭園学会誌21号、査読無し、2009年、pp.30-35

粟野隆、近代的庭園デザイナー・小平義近とその作品、日本庭園学会誌19号、査読無し、2008年、pp.65-70

〔学会発表〕（計5件）

粟野隆、日本近代の「田舎」志向とその庭園、公開研究会 アートの住まい 憧れを「田舎」に求めて、2011年12月10日、静岡県舞台芸術センター舞台芸術公園

粟野隆、ランドスケープ遺産イベントリーづくりに向けた課題、日本造園学会東北支部大会、2010年10月23日、宮城大学

粟野隆、洋風庭園と日本近代、奈文研公開講演会、2008年10月25日、奈良文化財研究所

粟野隆、近代日本の洋風庭園 その空間デザインの系譜、京都造園懇談会、2008年8月19日、京大会館

粟野隆、庭園史、平成20年度日本造園学会全国大会ミニフォーラム企画「ランドスケープ研究 歴史・原論分野の今とこれから」、2008年5月24日、北海道大学

〔図書〕（計4件）

粟野隆、東京農業大学地域環境科学部造園科学科、テキスト近代造園史、2011年、

全 82 ページ

河原武敏ほか、東京都公園協会、龍馬ゆかりの人々と5つの都立文化財庭園物語（東京都公園協会平成 22 年度特別企画展図録）2010 年、全 38 ページ（p.21）

武田史朗ほか、学芸出版社、テキストランドスケープデザインの歴史、2010 年、全 199 ページ（p.67）

岡本哲志ほか、求龍堂、一丁倫敦と丸の内スタイル、2009 年、全 127 ページ（pp.36-37）

〔その他〕

粟野隆・木下剛、特集「ランドスケープ遺産インベントリーづくりの現在 地域活動から全国展開に向けた現状と課題」にあたって、ランドスケープ研究 74 巻 4 号、査読無し、2011 年、p.267

池尻あき子・粟野隆、全国に所在する「ランドスケープ遺産」の把握と一覧作成のための事例募集について（中間報告）、ランドスケープ研究 74 巻 4 号、査読無し、2011 年、p.309

池尻あき子・粟野隆・葉山嘉一・高橋靖一郎・金子隆行・霜田亮祐、日本造園学会関東支部「参加者の拡大と多様な交流を深める新たな試み」、ランドスケープ研究 74 巻 4 号、査読無し、2011 年、p.325-327

粟野隆、旧前田邸の庭園の見どころと特徴、東京都教育庁ガイドボランティア養成講座（招待講演）2011 年 2 月 19 日、旧前田侯爵家駒場本邸洋館 集会室

粟野隆、大正モダニズムと公園の展開 近代造園の誕生、江東区文化コミュニティ財団豊洲文化センター講座（招待講演）2010 年 6 月 18 日、江東区豊洲文化センター

粟野隆、「旧古河庭園」によせて、日本庭園学会ニュース 59・60 合併号、査読無し、2008 年、pp.6-8

6. 研究組織

(1) 研究代表者

粟野 隆 (AWANO Takashi)
東京農業大学・地域環境科学部・助教
研究者番号：20393374

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：